

自分らしい表現を目指して試行錯誤する子どもの育成

—お互いのよさを認め合う鑑賞と試して表現する活動を通して—

図画工作・美術科研究会議

研究員 眞砂野 礼 (川崎市立川中島小学校) 佐藤 祐実 (川崎市立今井小学校)

深谷 昂弘 (川崎市立宮崎中学校) 中村清太郎 (川崎市立金程中学校)

指導主事 長澤 秀行

I 主題設定について

本研究会議では、図画工作・美術科で育成する資質・能力に向けて、解決すべき課題を研究員の所属校における子どもの姿から考えることにした。共通した姿として、「まあ、これでいいや」という子どものつぶやきなどのように、何となく表現するだけで表現を終えてしまう姿が見られ、自分の表現のよさに自信が持てず、試行錯誤しながら表現方法を工夫し追求できていないことを課題と捉えた。また、このことに関連して中学校学習指導要領(平成29年告示)解説美術編では、内容の取扱いと指導上の配慮事項(2)に、「各学年の「A表現」の指導に当たっては、主題を生み出すことから表現の確認及び完成に至る全過程を通して、生徒が夢と目標をもち、自分のよさを発見し喜びをもって自己実現を果たしていく態度の形成を図るようにすること。」と示されており、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説図画工作編においても、同じ内容が示されていることから、この課題の解決に向けて研究することとした。

本研究会議では、自分なりの思いを込めた表現に対して素直に「よさ」として捉えていることを「自分らしい表現を目指している姿」、自分の表したいことに向かって表現方法を工夫して粘り強く取り組んでいる姿を「試行錯誤する姿」とし、「自分らしい表現を目指して試行錯誤する子どもの育成」を目指すこととした。このような子どもの育成を目指すためには、子ども同士で多様な表現のよさを見い出して価値付け合い、自分の表現を「自分らしい表現」として肯定的に捉えられるようになる鑑賞の活動が必要だと考え、「お互いのよさを認め合う鑑賞」と表すこととした。また、多様な表現方法を試して技法に慣れ、試行錯誤してよりよい表現に向かって追求できるようになる表現の活動が必要だと考え、「試して表現する活動」と表すこととした。これらを踏まえ、研究主題を、「自分らしい表現を目指して試行錯誤する子どもの育成」とし、副題を、「お互いのよさを認め合う鑑賞と試して表現する活動を通して」と設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法 (1) 指導の工夫

①題材について

お互いのよさを認め合う鑑賞と試して表現する活動が効果的になるように、校種の実態に合わせた題材で検証することとした。小学校では、技巧的な面に視点を置いてしまう鑑賞になることを避けるため、何かを見て描くような題材ではなくモダンテクニック等を用いて自分の思いを抽象的に表現する題材で検証することとした。また、モダンテクニックを活用した題材は、表現を進めることで表したいことが深まっていく傾向があることから、試して表現する活動もしやすくなると予想されるため、検証する題材に向いていると考えた。中学校では、自分に関わりがある作品のよさをお互いに認め合うことで、改めて自分の作品のよさに気づきやすくなると予想し、自分の名前を印材に彫ったり、自分の好きなものや価値を感じていることを絵や立体に表現したりする題材で検証することにした。また、石を彫ったりスケッチから立体的に表したりすることは難しい面があるが、技法に慣

れて見通しが持てるようになれば試行錯誤して表現を追求できるようになると予想されるため、検証する題材に向いていると考えた。

②お互いのよさを認め合う鑑賞について

題材の導入時から、子どもがお互いのよさを認め合う視点をもって鑑賞できるように意識させ、グループで学習しながら、常に子ども同士で価値付け合うことを意識させるようにした。小学校では、様々な場面で会話やカード等でお互いの作品のよさを伝えるようにした。また、友達の作品を真似て表現することを通して互いのよさを認め合えるようにした。中学校では、よさを伝えることに恥じらいがある子どももいることが予想されるため、どんなよさについて互いに認め合えばいいのか明確になるようにした。

③試して表現する活動について

表現技法の特徴を捉え、見通しが持てるようにするために多様な表現方法を試すようにした。小学校では、本時前に多様な表現を試す時間を取るようにした。カード等の試した作品をスケッチブックに貼り、必要に応じて既習を振り返って生かせるようにした。中学校では、表現の過程において、子どもにとって難易度が高いと考えられる場面に試して表現する活動を位置づけるようにした。例えば、スケッチブックに描いた平面的な絵を基に立体的に表現することは、子どもにとって難しいと考えられることから、スケッチを基に粘土で試しながら表現する活動を位置づける等である。

(2) 検証の方法

①題材については、お互いのよさを認め合う鑑賞と試して表現する活動を位置づけることができ、試行錯誤する姿に結び付いたのか検証することとする。②お互いのよさを認め合う鑑賞と③試して表現する活動が効果的に働いたと考えられる子どもの姿は、(表1)のとおりとし、アンケートや振り返り、子どもの発言、図画工作・美術を苦手としている子どもの発言から見取ることとした。また、本研究では1題材での検証とし、題材実施後の姿として、「自分らしい表現ができたか」というアンケートの回答からおおよその姿を把握し、検証することとした。

表1 研究主題に迫れている姿

② お互いのよさを認め合う鑑賞

- ・表し方のよさを伝えたり、表現の工夫についてアドバイスをする姿
- ・友達から伝えてもらったよさやアドバイスを肯定的に捉えて、やってみようとする姿

③ 試して表現する活動

- ・多様な表現を試したことをまとめたスケッチブックを見返すなどして既習を生かし、表したいことに向かって試行錯誤する姿
- ・表現方法に慣れることで見通しがもてるようになり、表したいことに向かって試行錯誤する姿

2 研究の実践

(1) 検証授業Ⅰ (A小学校) 第5学年『TAROを超えTARO～絵から広がる世界～』絵に表す活動

①題材について

表2に示す学習計画で、川崎にゆかりのある岡本太郎作品を鑑賞し、作品から感じたことを基にイメージを広げた世界観を抽象的に表現する題材とした。鑑賞したL版サイズの岡本太郎作品図版から1つ選んで画用紙に貼り付け、貼り付けた図版の周りに自分のイメージした世界を広げて抽象的に描くようにした(図1)。子どもが試行錯誤して自分の表現を追求する際に、表現意図に合わせて表現方法や用具を選択して表せるように前題材ではモダンテクニック等の

表2 学習計画

時間数	学習計画
①	岡本太郎作品(1点)の鑑賞・グループ、全体交流
②	過去に鑑賞した作品を含めた計8点について、鑑賞したことをもとに題名をつけて交流する
③	選んだ作品から感じたことをもとに世界を広げる
④⑤⑥⑦	作品から広げた世界を工夫して表す
⑧	友達の作品をいいねカードを用いて鑑賞し合い、よさや面白さを見つける

様々な表し方を学習し、既習を生かせるようにした。個人の鑑賞で感じたことや考えたことをグループでの鑑賞で共有することを通して、見方や感じ方を広げ深めることに気づき、試行錯誤して自分らしい表現に迫れるようにした。

②「お互いのよさを認め合う鑑賞」について

本題材では、どの活動においてもグループで取り組むようにした。相互鑑賞では、「いいねカード」を活用するようにし、自分の表現を友達から価値付けてもらうことで、よさとして捉えられるようにした。その際、造形的な視点を提示（図2）し、形や色に着目して見方や感じ方を深めつつ、互いに価値付けられるようにした。鑑賞の時間以外でも、対話して認め合う様子が見られた（図3）。

③「試して表現する活動」について

本題材の前に、モダンテクニック等の技法や表現の違いのよさや面白さを学習する題材を実施し、既習を生かせるようにした。その際、技法を試したカードをスケッチブックに貼り蓄積した。本題材では前題材と同様の用具を用意し、自由に使用することができる環境にした。このように、既習を生かして自由に用具を選択できるようにしたことで、表したい思いに合わせて試行錯誤して工夫して表せるようにした（図4）。

④子どもの姿について

「お互いのよさを認め合う鑑賞」では、いいねカードや対話から価値付けてもらったことで、自分の表現を自分らしさとして肯定的に捉えている姿が見られた。グループで活動していることからお互いの活動が目に入り、自然と会話が生まれ、様々なヒントを得ている様子が見られた。新たな発想や表し方のヒントをもらったことで、試行錯誤する姿へと繋がっていた。グループ内で同じ作品を選択している子どもはいなかったため、他のグループで自分と同じ作品を選んでいる子どもを自ら探しに行き、表現の工夫を聞いたりどんな色を使用しているのかを見たりして、表したい事を工夫して表せるよう試行錯誤していた。

「試して表現する活動」については、前題材までに様々な表現方法を学んでいたことで、既習を生かそうとスケッチブックに貼った表現方法を見返す姿が見られた。自分が表したい表現に向けて試行錯誤する様子として、色を塗る際に会話からヒントを得て、パレット上で何度も混色する姿、遠くから自分の作品を見つめながら用具を変えて描き足す姿、友達同士で表したいことを伝えあって技法を相談し合う姿が見られた。着目した子どもは、事前のアンケートで「自分の作った作品が好きだ」という質問に対し、唯一「あまり思わない」と回答していた子どもだったが、活動が終わる際に、「これ、今までで一番いいよきだ」とつぶやく姿が見られた。表3の事後アンケートでは、自分らしい表現ができた



図1 子どもの作品



図2 造形的な視点の提示

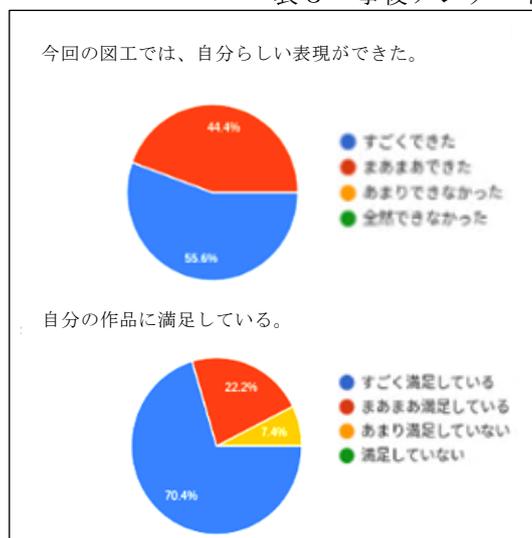


図3 対話し認め合う様子



図4 工夫して表す様子

表3 事後アンケート



自分らしい表現ができた」と肯定的に回答し、9割を超える子どもが作品に満足している結果が得られた。

(2) 検証授業Ⅱ (B小学校) 第5学年『心のもよう』絵に表す活動

①題材について

表4 学習計画

モダンテクニックの技法を用いて「心」を抽象的に表す題材を設定した(表4、図5)。本題材は、新年の抱負の意味を込めて、「これからも大切にしていきたい気持ちを絵に表そう」というテーマで作品に表すこととした。本題材では、各種のモダンテクニックを小さい紙に試しながら表現方法に慣れるようにし、形や色の特徴を捉えられるようにする活動を位置付けた。

時間数	学習計画
①	モダンテクニックのやり方を知りながら、自分の中の「ここ、いいね」をたくさん見つける。まねっこタイムを通して、自分もつ造形的な見方・感じ方を広げる。
②	鑑賞を通して、もようが気持ちに見えることを知る。単元全体の見直しをもつ。
③④⑤⑥	自分の心のもようを考え、作品をつくる。
⑦	作品をGIGA 端末にまとめる。振り返りシート作成をする。
⑧	お互いに作品を鑑賞し合い、自分もつ造形的な見方・感じ方を広げたり深めたりする。

②「お互いのよさを認め合う鑑賞」について

お互いに価値付け合えるようにするために、モダンテクニックを試した作品を乾燥させる場所を、「みてみてコーナー」として子どもの動線上に設け、作品を乾かしに行く度に自然と目に留まるようにした。価値付け合うだけでなく、自分と友達との作品の相違点を見つけ自身の思考を広げる手助けとなっていた。また、「まねっこタイム」を設けた。モダンテクニックの技法を実践する活動の途中で、ペアの友達の作品のよさを認め合い(図6)、友達が実践した技法を真似して表現するようにした(図7)。その際、必ず違う色を使用し、真似した表現からさらに考えを広げられるようにした(図8)。



図5 子どもの作品

③「試して表現する活動」について

モダンテクニックの技法を試すブースを設け、「やってみようタイム」を実施した。班ごとに回することで、手本を見ても分からないところをお互いに確認し合ったり、仕上がった作品を鑑賞したりと自然に対話が生まれていた。モダンテクニックを試した小さい作品カードはスケッチブックに蓄積し、自分の試した表現の振り返りができるようにした。小さいカードにモダンテクニックをしたことで、大きな画用紙の上でカードの配置を何度でも動かすことが出来るようになり、試行錯誤しやすくなるようにした。



図6 友達の作品

④子どもの姿について

「お互いのよさを認め合う鑑賞」では、「友達と話すからイメージがどんどん浮かんできた。」という声があった。着目した子どもは、今までは、友達がアドバイスをしても聞き入れることは少なく、「もっとこうすればよかった。」と後から振り返ることが多かったが、本題材では、お互いに自分の考えを伝え合うことで、友達の考えが自分の表現を豊かにしてくれることに気付いていた。



図7 真似して表現した作品

「試して表現する活動」については、表現方法に慣れるだけでなく形や色の特徴を捉えることにつながり、試行錯誤しながら自分の表現を追求する姿が見られた。着目した子どもは「やっていく中で、こうしようと自分の中でイメージがもてた。」「何度も試したりするうちに、自分の中で、この色は、楽しい気持ちに見えるなど気持ちを考えられるようになった。」と話していた。また、自分の学習を振り返りながら、自分の思いや考えに合わせた表現を目指して、試行錯誤しながら、自分の中のよりよい表現を追求していた。表4の事後アンケートでは、7割以上の子どもが、自

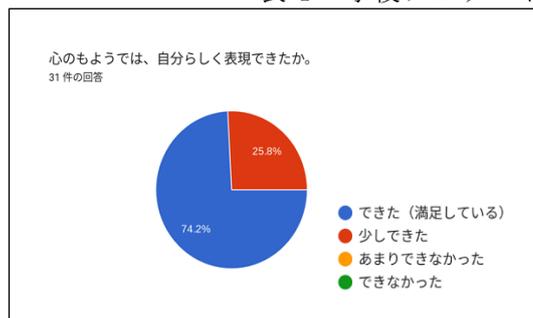


図8 考えを広げられた作品

分らしい表現が「できた」と回答した。

表4 事後アンケート

しかし、試すことを通して表現方法の特徴をつかめているものの、自分の主題を生み出すことにつながらず、試行錯誤するまでに至らない姿もあった。また、「自分が思うような色や表現にならなかった。」とつぶやいた子どもは、友達に何度も黄土色と黄色の混ぜる量を確認し、ローラーを何度も試しながら試行錯誤をしていたものの、自分の表現に満足できていない姿も見られた。



(3) 検証授業Ⅲ (C中学校) 第3学年『篆刻』

① 題材について

石材を用いて自分の名前を印面に彫り、取っ手の部分を彫刻する篆刻の課題を設定した。制作を通して造形的な見方や考え方を働かせるとともに、卒業を目前に今までの自分と向き合い、これからの自分について深く考えることで、自分らしい表現を肯定的に捉えられる活動につながると考えた。本題材の印面の表現では、篆書体の持つイメージや特徴を捉えながら主題を生み出して表現するようにした。持ち手の部分の表現では、表したいことを立体的に彫刻し、心豊かに表現するようにした。

② 「お互いのよさを認め合う鑑賞」について

アイデアスケッチの段階から、グループ毎にお互いのよさを感じ取ってよさを伝え合うことに視点を置いた相互鑑賞の時間を多く取り入れた。この鑑賞では、篆刻の文字の形のよさや面白さについて肯定的な視点をもってアドバイスをお互いにするを通して、客観的な視点を持ちながら自分らしい表現の工夫を追求することにつながると考えた。また、制作時の座席の配置を工夫し、お互いの手元や彫りの進み具合が見えるようにしたことで、お互いに認め合うような雰囲気生まれるようにした。

③ 「試して表現する活動」について

自分が表現したい内容に合う表現方法を追求できる手立てとして、印面を彫り進めていく途中で何度も試し押しができるようにスタンプ台と名刺サイズのカードを用意した。子どもは、ある程度彫った後、積極的に試し押しを行い、試行錯誤しながら表現を工夫していた。試し押しをする際にも周りの子どもたちが覗き込み (図9)、お



図9 試し押しを覗き込む様子

互いにその仕上がりを褒め合ったりアドバイスしたりする姿が見られた。持ち手の彫刻部分に関しては、彫刻していく過程で徐々に削って表現に慣れるよう、段階的に指導するようにした。

④ 子どもの姿について

本校は、自分の作品や表現に自信が持てない子どもが多く、特に子ども同士だとお互いに作品を見せたがらないことが見られる。今回の題材は自分の名前を表すことから、その傾向が出ることを懸念したが、「お互いのよさを認め合う鑑賞」を設定したことで、アイデアスケッチの段階から積極的に下描きを見せ合い、途中鑑賞でもお互いに認め合うような発言が多く、自分の作品を肯定的に捉えて自分の作品をよりよくするための手助けになっていた。着目した子どもは美術に苦手意識を持っており、普段は雑に早く課題を終わらせてしまうことが多いが、本題材では、座席を向き合わせて活動することで、導入の段階からお互いに見せあったり相談し合ったりすることができ、作品に愛着を持って自分らしい表現に向かって試行錯誤する姿が見られた。

「試して表現する活動」として、印面の試し押しをたくさんすることを通して、表現の高まりだけ

でなく、お互いの制作意欲の向上に繋がっている姿も見られた。また、よりよい表現に向かって試行錯誤するだけでなく、友達の実現や道具の使い方などからヒントを得ている姿も見られた。以前ならば教師に助言を求める子どもも、自分で試したり友達の制作の姿から表現のヒントを見出したりして自分自身の力で表現していく姿が見られた。このような過程を経て表現した作品であることから、特別な愛着を抱き、作品を丁寧に扱っている姿が見られた。事後アンケートによる全体の傾向は、自分らしい表現ができたと回答した子どもは、約7割であり、自分の表現に満足していると回答した子どもは、約9割だった。

(4) 検証授業Ⅳ (D中学校) 第1学年『自己紹介店～自分の好きをみんなに伝えよう～』

① 題材について

本題材では自分の好きなものを考えて、友達に伝えるために、「自己紹介店」を制作する。題材は複数で構成することとし、1題材目として自己紹介店のどこにどんな商品が置いてあるのか、一目でわかるような店内マップの制作を行うこととした(図10)。2題材目は、自己紹介店の商品やお店の雰囲気が感じられるような親しみやすいマスコットキャラクターを立体作品として制作することとした。



図10 店内マップ制作子どもの作品

② 「お互いのよさを認め合う鑑賞」について

制作時には座席配置をグループで向き合うようにして座り、顔を上げればすぐに友達の制作状況を確認できるようにした。試して表現する活動の後に、立体的な表現のよさや難しかったことに関してお互いに意見を交換して価値付け合うようにした。作品が完成した後の鑑賞では、お互いの作品の良さを肯定的に捉えて伝えるようにし、「自分だったらこういうふうにした」などのアドバイスが自然と行われていた。

③ 「試して表現する活動」について

1題材目の店内マップを考える際には、実際に自分のお店のマップを考える前の試す活動として、美術室内の物の配置や中学校の敷地内の建物の配置を上から眺めた絵を描き、普段目にしていない光景を真上から見たらどうなるのか想像できるようにした。2題材目のマスコットキャラクターを制作する際には、アイデアスケッチなどの平面的な表現を、粘土で立体的に表現できるように、子どもが知っているキャラクターを油粘土で表現する活動を位置付けた(図11)。



図11 油粘土で試して表現する

④ 子どもの姿について

「お互いのよさを認め合う鑑賞」として、グループの座席にしたことで様々なアイデアを伝え合い、お互いの作品を肯定的に捉えられるようになったといえる。試して表現した作品についてもよさを認め合う鑑賞をしたことで、お互いの制作過程での良さを見つけたり、自分の作品が認めてもらえたりすることを実感している姿が見られた。

「試して表現する活動」として店内マップ制作の前に、普段使っている美術室を真上から見下ろした絵を想像して描くようにしたことで実感が湧き、自分のお店を真上から見下ろした絵を描いていく際には、試して表現したことを生かして表現する子どもが多く見られた。マスコットキャラクター制作では、子どもが馴染みのあるキャラクターで試して表現したことを、その後の実際の制作に生かす姿が見られた。美術を苦手としている子どもは、「粘土は苦手だが、試す活動があったことでとても役立つ」と回答した。

本検証授業を通して、自分自身で気づいていないことに対して、「ここはこうした方がいいんじゃない？」などのアドバイスをもらい、自分の表現につなげている姿が見られた。「スケッチなどの平面作品から粘土で立体的に表現する時に、後ろはどうなっているのか想像する練習になった」などの声があり、事後アンケートでは、約9割の子どもが「平面的なものを立体的に表現する練習をしたことでマスコットキャラクターを表すのに、役に立った」と回答した。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 題材について

小学校では、モダンテクニック等を用いて抽象的に表現する題材で検証した。自分の表現を肯定的に捉え、表したいことに向かってモダンテクニックを活用し表現方法を工夫し、試行錯誤する姿が見られた。中学校では、自分の名前を印材に彫ったり自分の好きなものを絵や立体に表現したりする題材で検証した。自分に関することを題材にしたことから、お互いに価値付け合うことを通して自分の作品のよさを肯定的に捉えることにつながった。試す活動を通して技法に慣れて見通しが持てるようになり、自分の表したい表現に向って試行錯誤する姿が見られた。このような題材設定は、目指す子どもの育成につながることが分かった。

(2) お互いのよさを認め合う鑑賞

お互いのよさを認め合う鑑賞が効果的に働いたと考えられる姿として、小学校においては、カード等でお互いの作品のよさを伝える等のアドバイスを肯定的に捉えて、やってみようとする姿が見られた。中学校においては、篆刻の文字の形のよさや面白さ、立体的な表現のよさや難しかったことに関して具体的な視点を意識させたことで、表し方のよさを伝えたり表現の工夫についてアドバイスをしたりする姿が見られた。題材の導入時から、お互いのよさを認め合う視点を持ちながら価値付け合うことを常に意識させることで、自分の表現をよさとして捉えることにつながることが分かった。

(3) 試して表現する活動

試して表現する活動が効果的に働いたと考えられる姿として、小学校では、本時前に多様な表現を試す時間を取って既習を生かせるようにしたことで、表現に迷った時などにスケッチブックを見返すなどして既習を生かし、表したいことに向かって試行錯誤する姿が見られた。また、図画工作を苦手としている子どもが、「何度も試すうちに、自分の中で、この色は、楽しい気持ちに見えるなど気持ちを考えられるようになった。」と話すなど、既習を生かして表したいことに向かって試行錯誤する姿が見られた。中学校では、表現の過程において難易度が高いと考えられる場面に、試して表現する活動を位置付けるようにした。篆刻では、試し押しを繰り返すことで表現方法に慣れ、どこを直せばよいのが明確になって見通しがもてるようになり、表したいことに向かって試行錯誤する姿が見られた。また、自己紹介店の事後アンケートでは、約9割の子どもが「平面的なものを立体的に表現する練習をしたことでマスコットキャラクターを表すのに、役に立った」と回答した。

小学校のスケッチブックのように、「表現の痕跡を残す」ことは、自分の表現を見直すきっかけになり、試行錯誤する姿に繋がっていくことが分かった。中学校では、難易度が高いと考えられる場面に試して表現する活動を位置付けることは、見通しが持てるようになるだけでなく、美術が苦手な子どもにとっても有効であることが分かった。このように、試して表現する活動は、自分らしい表現に向って試行錯誤する子どもの育成につながることが分かった。

(4) 自分らしい表現を目指して試行錯誤する子どもの育成

「自分らしい表現ができたか」という事後アンケートの肯定的な回答は、7割前後であったことか

ら、概ね自分らしい表現に迫れることが分かった。自分の表現を肯定的に捉えられるようになることで、試して表現する活動がより効果的に働き、試行錯誤することにつながった姿も見られたことから、これらが相互に関連し合うことで、より一層目指すこどもの姿の実現につながっていくといえる。

2 研究の課題

(1) 題材について

小学校のモダンテクニックを活用した題材では、子どもにとって作品のゴールが見えにくく感じられることもある。表現したいことが明確になっているからこそ自分で作品のゴールを決められるものであることから、自分の表したいことをより明確にできるようにする必要がある。

中学校の自分に関わりがある題材では、作品のよさをお互いに認め合うことで、改めて自分の作品のよさに気づきやすくなると考えて設定しものの、自分自身に対する恥じらいをなくすことが難しい子どももいることから、他の題材でも実施できるようにする必要がある。

(2) お互いのよさを認め合う鑑賞

どの検証授業においても、題材の導入時から子どもがお互いのよさを認め合う視点をもって鑑賞できるよう、グループで学習しながら、常に子ども同士で価値付け合うことを意識させるようにしたが、「単なる褒め合い」になってしまうこともある。互いのよさを見つけ出すことができなければ、お互いに認め合う活動にはなりにくいことから、形や色、表現の工夫など、題材のねらいに合わせた視点をより明確にして指導する必要がある。

(3) 試して表現する活動

小学校では、試すことを通して表現方法の特徴を捉えながら表現はしているものの、自分の表したいことを生み出せていないために、自分のゴールがみえないまま表現していることがある。これとは逆に、試す活動を通して表したい内容がより深まった子どもが、それに合う表現方法に出会えなかったり生み出せなかったりすることで、自分の表現に満足できなくなってしまいう場合もある。中学校では、技能に慣れ、見通しが持てたことで試行錯誤し表現を追求することができたものの、「試しの方がよかった」ということがある。試しをする以上、起こりうることではあるので、「試し」であっても自分の作品であることの指導も必要だといえる。

3 まとめ

お互いのよさを認め合う鑑賞では、形や色、表現の仕方の工夫と、よさを認め合う視点を持ちながら鑑賞する必要がある。試して表現する活動では、試す活動の中で、表したいことに合うかどうか問い返したり、試したことから表したいことを考えることを繰り返すなどして、表したいことを生み出せるようにしていくことが考えられる。また、新たな表現方法を追加したり、既習の表現方法を別な視点から見つめ直したりして新たな表現を生み出せるようにすることも考えられる。

本研究では、お互いのよさを認め合う鑑賞と試して表現する活動が効果的に働くと予想される題材で研究した。今後は、対象としなかった題材においても効果的に働くのかどうかを検証し、お互いのよさを認め合う鑑賞と試して表現する活動について、より汎用的な考え方を明らかにすることを目指して研究していきたい。

最後に、本研究を進めるにあたり、適切なお助言を頂いた先生方、研究をご支援いただいた研究員所属校の校長先生並びに教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 図画工作編（文部科学省）

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 美術編（文部科学省）